

# JFA 田嶋会長×岡田監督×熊本市現代美術館 マッチフラッグプロジェクト 2022 熊本 開催記念トーク

日時 2022年11月3日(木) 11:00-11:45  
場所 熊本市現代美術館 ホームギャラリー  
講師 田嶋幸三(JFA 会長)、岡田武史(JFA 副会長)  
司会進行 日比野克彦(熊本市現代美術館館長)



---

MATCH FLAG PROJECT マッチフラッグプロジェクト 2022 熊本

会期 2022年10月10日(月・祝)

会場 熊本市下通二番街商店街、花畑広場(辛島公園)、熊本駅白川口駅前広場(アミュひろば)

会期 2022年10月12日(水) -12月18日(日)

会場 熊本市現代美術館 アートラボマーケット

熊本市現代美術館アートラボマーケットで継続して制作し、合わせて過去のマッチフラッグの展示を行った。(丸尾焼、不知火美術館・図書館でも同時開催)

**日比野** 本日は、JFAの田嶋幸三会長と、岡田武史副会長に来ていただきました!ようこそ熊本市現代美術館へ!

今、この会場にはマッチフラッグプロジェクトのフラッグが飾られております。

マッチフラッグプロジェクトについて説明しますと、サッカーワールドカップ開催の年に行う、スポーツとアートが繋がったアート・プロジェクトです。

日本が対戦する相手の国旗と日本の国旗を1枚の旗にデザインし、参加してくれる市民の皆さんと一緒に作ります。そして完成したフラッグを、試合を行うスタジアムや、試合を見る場所、例えばパブリックビューイングなどに掲げて、対戦する両国を応援するプロジェクトです。

いま僕らの目の前にあるのは、今年の2022年カタール大会で日本が対戦する、ドイツ、コスタリカ、スペインの3つの試合のマッチフラッグです。ここ熊本市現代美術館で作りました。

**田嶋** 皆さん、はじめまして。田嶋と申します。日比野さんに謝らなきゃいけないのは、僕は熊本県出身で、そしていつもこちらに来るときはホテル日航熊本に泊まってるのですが、それにもかかわらず、今回、初めてこの美術館に来ました。本当にすみません。もっと来るようにします!このマッチフラッグプロジェクトは、僕が専務理事の時に、そして日比野さんがJFAの理事の時に、芸術とスポーツを融合させようと思ったものです。最初このイベントを行ったのは、まさにこの熊本で行われた、イエメンとのAFCアジアカップ予選です。

僕も、商店街の2階の小さな作業スペースでマッチフラッグを作って、その後、試合を応援に行ったことを覚えています。岡田監督だったかな?

**日比野** 試合は2009年1月だったので、作り始めたのは年明けすぐからでした。熊本で初めて日本代表の試合が開催ということで盛り上がったんですよ。

**岡田** 2009年の1月なら僕だね!このプロジェクトを始めたきっかけは?

**日比野** 僕は、2006年に熊本市現代美術館で個展をやらせてもらいました。その後も、当時まだ「ロッソ熊本」だった時代ですが、その関係者達と、街と美術館をつなぐ何かをしたいねと、スタジアムとミュージアムを繋ぎたいねと話していました。そこに、日本代表が来ることが決まり、ここでワーッと盛り上げよう!と。それで、イエメン戦に、イエメンと日本の旗と一緒にデザインして作ろうというアイデアが出て、たくさんの熊本の人達と一緒に作って、スタジアムに持っていこうという話になりました。それがマッチフラッグプロジェクトの始まりです。その時は300枚ぐらい作って、空港や商店街などに飾りました。

**岡田** 試合の時、スタジアムにもありましたか?

**日比野** 飾りました!その時はまだフラッグのサイズが小さくて畳んで持って行きました。このプロジェクトは、熊本から日本中に広がって行って、各地域で作りました。きっと今日会場に来て

る方々も、参加したことがある人達がいるんじゃないかな。

次にこのプロジェクトを行ったのは、2010年の岡田さんの第2次政権の時です。2010年南アフリカ大会で作ったのがこのマッチフラッグで、カメルーン、オランダ、デンマークとの試合がありました。これは熊本市内でつくったカメルーンと日本のマッチフラッグです。こうやって皆で願いを込めて、南アフリカに行けない人達も、心は南アフリカに行くんです。

これは、「デンマークの試合も同じ24日にあるんだね」と皆で話をしながら、グループリーグの3つの試合のマッチフラッグを作ったものです。左がオランダ、真ん中がカメルーン、右がデンマーク。「日本が勝つといいよね」「勝ってほしい」という気持ちを皆で作っていきました。



**岡田** このプロジェクトは、熊本で始まったのか…!全然知らなかったです。

僕と日比野さんとは長くて、30年ぐらいの付き合いなんだけど、今日のトークも何をするか教えてくれなくてね、とにかく来てって言われるんですよ（笑）。

熊本のロアツソの大木武監督は2008－2010年の間、日本代表のコーチでした。マッチフラッグは、僕が日本中から批判されていた南アフリカ大会の時、練習場の壁にいきなりこれが飾ってあったのを覚えています。

**日比野** そうです。日本中でつくったマッチフラッグを南アフリカに持って行きました、岡田さん、これは見覚えありますよね？

**岡田** あるある。宿舍と練習場はちょっと離れていて、警備されてバスで移動するんだけど、

一般の人とは一切接することが出来ない。そうしたら遠目に「あそこで、何かしてる人がいるみたいだな？」と思ったら、日比野さんがいた。「ああ、中には応援してくれてる人もいるんだな」と、ちょっとホッとしたんだよ。

**日比野** そう思ってたんですね…。

**田嶋** 選手・監督は、ホテルと競技場と練習合宿所だけの移動に行動範囲が限定されます。雑音を消して集中する環境です。皆がトレーニングしている場所に、このマッチフラッグがあって、応援してくれる皆の声があるというのは、初めての体験でした。

**日比野** スライドには、岡田さんが写ってる写真もありますよ。

**岡田** ちょっと若いね（笑）。

**日比野** この写真は、サポーターたちの宿泊していたホテルです。南アフリカは危険だということで、なかなか自由な行動が出来なかったんです。

**岡田** 実際は、大会で立ち寄った土地は、全部軍隊が守ってて、街の中は安全だったんですよ。悪い奴は郊外にいて襲われることもあったと聞きました。

**日比野** ホテルから街の中まで行くのに、顔なじみのタクシーを呼ぶんです。ショッピングモールみたいな場所に行けば、その中では自由なだけけれども、帰りは指定時刻にタクシーを予約する必要がありました。そんな環境の中、ホテルで、皆でマッチフラッグを作りました。また、スタジアムには、あまり大きい荷物を持ち込めないので、会場に到着してからひもで繋ぎあわせて大きな旗にして掲げたんです。

**岡田** 持って行く時は、飛行機に荷物として積んで行くんですね？大変ですね。

**日比野** トランク4つで持って行きました。岡田さん、このデンマーク戦の試合では…。

**田嶋** 3-1でした。

**日比野** きっと監督から見れば、風景がきっと全然違うんでしょうね。

**岡田** 試合中はそんな余裕なんて無いんですよ…！

**日比野** 皆の気持ちを、試合に届けるのがマッチフラッグです。デンマークに勝って「ベスト

16 になった!」って盛り上がりましたね。

**岡田** デンマークとのマッチフラッグはそれから作ったんですか？

**日比野** それから作ったんです。カメルーンに 1-0 で勝ち、オランダに 0-1 で惜しくも敗れ、デンマーク戦では 3-1 で勝って。そしてパラグアイ戦はどうなるか…と、このフラッグは現地の皆で作りました。2010 年 6 月 29 日。

この試合を岡田さん振り返ってみましょうか、延長戦の最後は PK 戦でしたね。

**岡田** もう忘れちゃったよ…。そうだったみたいです！

**日比野** ベスト 8 にあと一歩でした。ベスト 8 に 9 位という順位があるとするならば、9 位。そして、いまサッカー協会は「まだ見ぬ景色」というフレーズを掲げていますね。

**田嶋** 「まだ見ぬ景色」についてお話をしますと、ワールドカップで優勝するチームというのは、その国にサッカーの文化がちゃんとあって、チームにもその色が出ていて、そして初めて世界で勝てると思うんです。

日本も、ドイツから学んだり、フランス人の監督から学んだり、やっと今、日本人らしいチームになりつつある。

それは岡田監督であり、西野（朗）監督であり、皆が築いてきた歴史なんですけど、今、本当に自信を持って、森保（一）監督とチーム選手たちが、思うようになってくれていると肌で感じています。

「新しい景色」と言うなら、岡田監督はあの時の PK 戦で、もう少しのところまでの景色が見えたんだと思うんですよ。振り返ると、1993 年は、もう少しでワールドカップに行けるというところまでで、残念ながらドーハでは進めなかった。そうやって皆で少しずつ上を目指して、そしてワールドカップに出られるようになったら、その次はこうしたいっていう景色が見えてくる。最初は夢としての新しい景色。そして今、現実的な夢、現実的な目標として、「新しい景色」を見られるようになった、すごく幸せなことだと思っています。

**日比野** 「サッカーが本当の文化になっていかなかったら、世界には勝てませんよ」と僕はずっと言い続けてます。

2006 年のワールドカップで、ドイツ開催の時、実は美術館を日本サッカー協会の拠点にしたんです。それで大人のファンが増えたんですけど、残念ながらその時だけでしたね。南アフリカの時には、「ただでさえお金かかるんだから、お前ら浮かれ過ぎるな」と言われたり…。

**田嶋** でも本当は新しい景色を見たいです。今回こそ！

**日比野** ベスト 8 もだけど、いつか優勝を見たいです!そのビジョンを持って、毎日毎日、1日1日の努力が重ねられていく。

いま熊本市現代美術館で、マッチフラッグを作っているのですが、実はもうひとつの目的があって、過去のフラッグを展示しています。これらを通じて、これまでの歴史を振り返ることが出来るんです。2010年6月29日にパラグアイで試合があった、あの時のあの事と、「まだ見ぬ風景」の未来が繋がっている。そういう意識があるので、マッチフラッグには、必ず日付を入れてます。何年何月何日、どこで開催したのかを明記しますし、当然、対戦相手が入っています。

試合は90分で終わってしまうのですが、例えばスペイン戦は、今年の12月1日、カタールで試合がある予定なんですけども、今から一カ月後のことを思いながら、ここで、皆で、スペインと日本の試合のことを思いながら、フラッグ制作をしながら、当日を迎える訳ですよ。

このフラッグもまた、5年後とか10年後に、その当日を振り返る時、このパラグアイの旗のようになると思うんですね。そしてそれはきっと、文化になっていくのだと思います。一朝一夕では出来なくて、続くことによってその地域の文化になっていく。

このマッチフラッグは、2009年に熊本から始まり、その間、ワールドカップで日本が7大会連続出場し、今年は22年カタール大会。今年もまた、マッチフラッグをこの美術館で開催し、田嶋さんと岡田さんが来ていただいて、過去を振り返りながらまた今年の試合を応援する。

日本の試合の次の試合は、どうも勝ち抜くと、あの時の、あの国と戦いそうですね。

**田嶋** ロシア大会の、最後の14秒。

**日比野** あのベルギー戦。2位抜けだとベルギーと戦うはずなんでしたよね。

**田嶋** ベルギーが1位になればね。

**日比野** となると、ベルギーと日本のマッチフラッグ作ってみたいと思いませんか! (会場拍手) それを作れることを目指して、まずは3つのマッチフラッグを、皆でつくっていきたいと思います。

**田嶋** まずはスペイン戦です。SAMURAI BLUE をよろしくお願いします!

**日比野** さて、ご存知かもしれませんが、日本サッカー協会という組織は、地域に根差したクラブチームをまとめていて、指導者も含め、地域のチームの代表などJFAに関する様々な仕事を展開しています。

実は大木監督は岐阜出身で、熊本に来る前に、FC岐阜で監督をされていたのですが、なかなか上手いかず…。熊本ですごくうまく行って良かったと思いました。

**岡田** その間に今治にも2、3年在任していましたよ。

**日比野** 失礼いたしました!岡田監督、地域に根差したクラブチームについて、ぜひお話をお願いします。

**岡田** 僕はアートってそんな詳しくなくて、それでも好きな絵を見たりはしていたんだけど、アリゴ・サッキっていう AC ミランの監督、超有名人に知己を得た時、最初に「あなたがいいコーチになりたかったら絵を見なさい。音楽を聴きなさい。芸術を感じなさい。」と言われました。「一体、何を言ってんだらう?」と思ったんだけど、だんだんその意味が分かり始めたのは、経験を積んできてからです。

文化っていうのは、おそらくけど、生きるか死ぬかの時には起こらない。音楽というのは危険信号が始まりなんだろうけど、誰も攻めてこないし危険ではないと、ゆとりが出来た時に初めてリズムを楽しんだんじゃないかと思う。

スポーツの始まりも、狩りで獲物を取ってこないと家族が飢え死にするという中で、マンモスの狩りに成功して、この1週間は狩りに行かなくて良いとゆとりが出来た時に、初めて「いやいやお前の弓の方が俺のよりちょっと大きいんじゃないか?」とか、そういうところからルールができ、始まっているんじゃないかと思うんです。

我々が作ってきたのは、便利・快適・安全な素晴らしい社会なんだけど、何もしなくても生きていける社会をつくったときに、文化がないと生きていけなくなったんじゃないかと、逆に感じてます。

そしてこのコロナで、日本人がそれを感じ始めたと思うんです。今まで経済ばかりが大事だと思ってたのが、物質的な価値よりも文化的な価値の意味について、これがないと、やりがいも生きがいもなく、生きていけないということに少しずつ気づき始めたんだと思うんですよ。

僕も最初、コロナが始まって2ヶ月家にずっといたら、こんなにお金を使わなくて暮らしていけるのなら、今まで何に使ってたんだらう?と思いました。お金は、不要不急の物事のために使ってたんですね。不要不急も大事だけど、その次には、応援したくなるもの、共感するもの、要するに文化的な価値があるものに使いたいって、皆さんが思い始めたんだと思います。

そして街を歩いている人、散歩したりジョギングしてる人がやたら増えてきた。今まで遊園地に行かなきゃ気が済まなかった人が、その辺を喋りながら楽しんでいる。僕もドイツに住んでたことがあって、週末はどこも閉店しているんですよ。ショッピングもなにも店が開いてないから出来なくて、そうすると家族で川べりを散歩してそこで座って喋ったりする。今、もしかしてそういうものの価値に気づき始めたんじゃないかな。だから日比野さんがずっと言ってきた「文化とスポーツの融合」の価値が、まずは認められてきたっていう感じがして、僕は、コロナはスポーツの追い風だと思っています。

**日比野** そうですね。改めて、人と直接会うってということって何だろうと考えさせられましたね。コロナ禍がなかったら、2020年にオリンピックも予定通りで、きっとイケイケの感じがあったかもしれない。今は大変な真最中ではあるけれども、新しい生活、新しい価値を築いていく時かなと思っています。

文化の役割とか芸術の役割というのは、ただ単に、美術館の中で絵を鑑賞する、音楽のコンサートを聞くというだけじゃないんです。スタジアムに行って試合を観戦するだけがスポーツ観戦ではないように、人と人の関係性というところにあると考えてます。

例えば、ロアツソの試合を見に行く人たちが、商店街や街の中で、コミュニケーションを取って、応援する。「応援する旗を作ろうか」とか、「試合にこれを着て行こうか」とか、自分達で街の中にスポーツとアートの拠点を作っていくことで、どんどんその地域らしさとかが出てくると思います。

この美術館の館長に呼んでいただいて、ちょうど1年半ぐらいになるんです。ここは街の中にある美術館で、上通・下通があって、少し前にサクラマチが、商店街の傍にまたひとつの大きな拠点が出来て、活気のある街です。高校生たちも、色んなハンディを持った人達も、一緒になって過ごすことが出来る空気感のある熊本市には、本当に可能性を感じています。新しい生活様式、新しい価値観を発信できる拠点だと思うので、この美術館でもその役割の一端を是非発揮していきたいと思ひますし、と同時にロアツソも盛り上げていきたいと思ひます。

地域づくりについては、この美術館は熊本市の美術館ですし、市役所もすぐ側にあつて、市役所と連携して、市が抱えてる課題や、様々な地域の課題についても、美術館が関わることで解決出来るきっかけを一緒に考えていこうというリサーチも行つてるんですよ。

まちづくりについては、岡田さんも今、今治を拠点にして、まずはスタジアムづくりから開始してますね。

**岡田** なかなか J3 から上へ上がれなくて苦労しているんだけどね…。

今治には、僕は最初サッカーのことだけのつもりで行つたんです。主体的にプレーする自立した選手の育成をやってみたいと思つたんですよ。

現地に行つたら、昼間の商店街は誰も歩いてないし、デパートの跡地がバンバン更地になつて、「これじゃ、僕が成功しても見に来る人いなくなる、街がなくなっちゃう」と思つて、そこから色々なことを始めるなかで、交流人口を増やすことに注目しました。

交流人口を増やしたら、「ここでたこ焼き屋をやつたら儲かるかも？」という兄ちゃんの関係人口になつて、その兄ちゃんが今治で結婚して定着人口になるとかね、そういうやり方が絶対良いだろうと思つたんです。

まず交流人口を増やすこと、それが我々には出来る。J2 に上がるのに、今治にはスタジアムが無かつたので、その拠点としてスタジアムを建てる。まず3億8千万円で5千人収容のサッカー専用スタジアムを建設しました。次は1万人のスタジアムが必要なんだけど、42億円ぐらいかかるんですね。それで僕は、ストーリーを考えて投資してもらうことにしました。今治の「治」を冠して「バリ・ヒーリング・ビレッジ」と名付けました、それが里山スタジアムです。

これからAIやICTが発達していくから、AI社会が必ず来るんです。家にあるAIスピーカーに毎日話してたら、AIが自分のことを自分より分かつて、「AI、AとBとどっちと結婚したほうが良いか？」って聞いたら、AIが「あなたはAと結婚したいと思つてるけど、Aと結婚したら3年以内に別れる確率68%。Bと結婚したら10年保つ確率80%」って答える。絶対当た

るんですよ。当たるってなったら、ナビに従って車を運転する人間は必ず AI の言う通りにする。失敗のない人生、悪いことじゃない。

しかし、人間の幸せというのはそれだけじゃなくて、困難を乗り越えて成長したり、誰かと助け合って絆ができたところにもあります。それを提供できるのがスポーツであり文化というものなんです。だから我々のスタジアムというのは、東京の IT や金融に疲れた若者が来たら、人間性を取り戻して帰るようなところを目指しています。芸大とも提携してもらおう。誰でも、音楽や芸術に親しめる場所にしようと考えてます。

本来は駐車場にするところを「里山エリア」と名付けて、畑を作ったり、障がい者の通所施設を作ったり、様々なことが出来る場を作って、新しいコミュニティを作るんです。

我々のコミュニティに入ってくれたら、衣食住を保証し合う。着るものは余ってるものをみんなで融通する。スタジアムのオープンキッチンには、街のレストランのシェフに月に一回ボランティアでつくりに来てもらって、皆で安く食べる。空家がいっぱいあるから皆で修理する。その時に、例えば大工の技術があったらそのノウハウに価格がついて、仮想通貨で受け取ることが出来る。貯蓄できない仮想通貨は、経済が早く回るようになる。そういう新しいコミュニティをつくっていききたい。多様な価値を享受するコミュニティです。

そういうことを、全国 60 ある Jリーグのチーム全部がやって、または Bリーグのチームが中心になってやったら、この国は変わるんじゃないか。そういう思いでやっていますが、その中で、日比野さんの言うアートの力は、どうしても必要だろうということで強引に提携を結んでいます。芸大からは「格が違うから出来ない」と言われたので、愛媛県と芸大が提携して、実際はうちでやる。誰でもが、音楽に親しめたり、学生が来て絵を描いてるのを見て真似したりとか出来るような、そんな場所が出来ると良いね、と。これぐらいホラ吹くとね、コロっていきます（笑）。来年 1 月 25 日に完成する予定なんですけど、今度は借金を返さなきゃいけない。銀行に出すファームシート、返済計画には「J2 に今年上がります」と書いて提出していますので、今慌てて計算し直してて、他にも、補助金つけてくれるかどうかを交渉中です。

**日比野** 岡田さんの場合は、AI に「こっちのほうで成功するよ」って言われたら、そっちじゃない方を選ぶんでしょう？そっちの方が、俺が強くなれる気がするとか言って（笑）。AI が「ちょっと待って、そう選択する人がいるの?!」と混乱するんじゃないかな。

**岡田** AI の言う通りに生きることで満足できるのは、ホモサピエンスじゃないのよ。ホモデウス。神のヒトって意味ね。ホモサピエンスは、失敗しないというだけじゃ面白くないんだよ。でも勝てないの。だから、今治をホモデウスに対するホモサピエンスの基地にするし、俺はセトウチ王国の国王になって、そこからレジスタンスを始めるの。瀬戸内海をまず制して、東京に向かって打って出る（笑）！

**日比野** 皆さん拍手をお願いします（会場拍手）。岡田さんの DNA をもらったホモサピエンスがここにもいますね。

例えば、我々が2足歩行しているのも、危険を侵して木から降りて、獲物を捕りに行ったからなんだよね。そうしないと今のここの進化はない。怖いから止めておこうって言ってたら、いまだに木の上のいたってことだよ。いろいろな戦いがあるけど、それに挑むのがホモサピエンスらしさなんだろうね。

田嶋さん、岡田さんとは長い友人関係でしょう、岡田さんのこの性格についてはいかがですか？

**田嶋** すごい天邪鬼。こっちが危ないという方を選んで行動する、そこは大したものです。

**日比野** 逆を言えば良いんですね。

**岡田** それはトルシエだよ。「そこを誰々に出せ！」っていうの絶対使わないもんね、あいつ。

**日比野** じゃあ、気が合うってことですか？

**岡田** いや、あんまり気が合わない。何回も喧嘩している（笑）。

**日比野** 田嶋さんは熊本県出身ですよ。

**田嶋** はい。熊本は、美術館がいくつもあるし、上通も下通もあって、文化の重みがあるんです。アーケードの通りにも、時々色んなものが飾られていますよね。雨に濡れないし便利です。ここは、すごく好立地な美術館で、市民の人たちと一緒に活動しているところは、さらに発展させていってほしいです。

**岡田** 熊本って人口減少してない珍しい地方都市なんだけど、何かがあるんだろうね！松山も大分減ってきていて、今治は15万人しかなくて毎年減少していたのが、今ストップしたんですよ。それは俺らだけのせいじゃないけど、何がきっかけかって言ったら、そこにいる人の魅力ですよ。

最初に今治に行った時は、「お前何言ってんだ？今治はもう無理だ、何を考えてんだ」って散々言われた。でも今の、今治の人達は、かなり盛り上がっていて、SNSで「こんなに面白いところがある」とか「こんなに美味しいものが食べれる」と発信するから、人が集まってきて、1500人移住しているんです。そして、「日本一移住したい街」に選ばれたんですよ！

熊本も、何かそういう動きがあるのかな、自慢したくなる部分って何だろうね？うちにはバリーさんがいますけど、くまモンかな？

**日比野** 下通から、商店街の前原さんが来ていますね。発言をお願いします。

**前原** 下通繁栄会の前原です。よろしく申し上げます。本当にお話が面白くて、ずっとお聞きし

ていたいほどです。

熊本の魅力とは何か。魅力は、人ですよね。人が良いっていうか、お人好しの部分もある。僕は街で商売やってるんですけども、コロナを経験して、先ほど日比野館長からも発言があったんですけども、人との繋がり、皆さんやっぱりそういうものをものすごく求めていたんだな、という実感です。宣言が明けたとなったら、ものすごい数の人達が下通を歩き出したんです。特に買い物をするとか、うちの店で買ってくれるとか、そういう動きではなくて、人に会いに来てんだな、とすごく感じました。なので、人に対する愛情っていうか、余所から来られた方にもおもてなしの気持ちがあるとか、そういう部分が人口減少しないことに繋がっているのかなと思います。

もちろん流入人口については、ここにいる僕らが楽しいから、楽しんでるからこそ、周りから来た人達は「住んでみたいな」とか「遊びに行ってみたいな」と思えるのかもと思いますし、この街中から、現代美術館から、いろんなことを発信していけたら、今後も、熊本はもっともっと魅力的になると思います。



**岡田** 下通では、マッチフラッグのような、こういうワークショップ的なイベントを他にも色々やっているんですか？

**前原** やっています。ちょうど今日から、今ちょうど青年部が設置作業してますけど、「肥後の

つりてまり」というイベントが開催されます。これは、熊本に「肥後てまり」という伝統工芸があって、その文化を受け継いでいこうと下通の青年部がやり始めました、今回で第14回目です。もし良かったら会場の皆さんも、アーケードの入口のところにも飾っていますので、ご覧いただけたらありがたいです。そうやって、街中で何かが行われていることが、人を街に呼ぶことに繋がると、僕らも一生懸命励んでおります。

それと、サクラマチやアミュプラザくまもと（熊本駅）と、新しい拠点が出来ましたので、様々な文化的事業や、音楽イベント、もちろん集客イベントについても、共通する団体も間に入っていますので、今後はうまく3拠点で回していけたらという期待はあります。

**日比野** ありがとうございます（会場拍手）。

**岡田** 素晴らしいですね。要するに、文化を中心に皆が生き活きしてるから、人がそれに釣られて集まってきているということでしょう、ひとつの理想のモデルですね。そこでサッカーも出来るかな。

**前原** はい！

**岡田** 大木武をよろしくお願いします！すごい面白いじゃない、熊本！

**日比野** 会場の皆さんから質問ありますか？最前列で、気合入れて、ユニフォームを着ている男性の方、どうぞ！

**岡田** 1998年の、俺が最初にワールドカップに出た時のユニフォーム？

**質問者1** その頃からのサッカーファンです。当時はasics。

**岡田** そうだよな！僕は去年までadidasと契約してて、今asicsですよ。asicsが面白い。

**質問者1** 皆さんにまちづくりについてお聞きしたいんです。サッカーもアートも、地域づくりに本当に貢献していただいていると、熊本でもすごい実感するところなんですけども、今治でのご経験があるように、全国各地域での、Jリーグの目指すところの構想のなかでのまちづくりの発想というのかな、それを促すうえで、特に意識してらっしゃるところをお聞きしたいと思います。

**岡田** 先ほどお話したように、まちづくりに関して、途中でやらなきゃいけないと気づいたんですけど、僕は夢を語るしかなかったんですよ。

この前、四国ガスの社長に会いに行ったら、「岡田さんが来た8年前は、この人本当ホラ吹きだと思った。ところがひとつずつ実現して、いよいよスタジアムが出来るんですね！」と言ってく

れたんだけど、もう本当にその通りです。まず夢を語って、でも夢を語ってるだけだとホラ吹きなので、リスクを冒してチャレンジしていく。その中で、助けてくれる人が出てくる。そういう繋がりが出てくる。「土地の30年の無料貸与が決まりました」、「設計図出来ました」、「工事業者決まりました」、「岡田さんがあと40億集められるでしょ」って言われて。正直集める自信なかったですよ。集まらなかったら自殺せないかな…、と本気で思ってたぐらいなのに、ところがお金が集まったんですよ。このまま続くかどうかは、分かんないですよ。借金返さなきゃいけないからね。どうなるか分かんないけど、僕ができる部分はそれしかなかったという感じがですね。

**田嶋** 日本サッカー界、スポーツ界のためにも、今治で成功してもらわないと!熊本の皆さんも応援してくださいね。

サッカーって、本当に文化なんですよ。1000年ぐらい前から、ヨーロッパあるいは世界中でサッカーに似たスポーツが流行ったことから始まっていて、今のサッカーの原型は、イングランドやイタリアなどで行われた「モブ・フットボール」、群衆のフットボールという意味のスポーツで、街の城壁にボールを入れるような、ボールの無いところでは殴り合いをするようなものでした。そのように、街そのものに根付いている。例えばイタリアなんか2大会もワールドカップに出ないんですよ。だけど、ユベントスとACミランの試合は超満員です。要するに、地域に根付いていれば、サッカーはどんなことがあっても廃れないと思っています。

でも逆に、日本は、日本代表が負けたらJリーグにも影響してしまう。川淵三郎さんがチェアマン時代に「Jリーグ百年構想」と打ち出しましたが、チームが地域にしっかり根を張っていれば、もしかしたら今後、ワールドカップの予選で負けたりすることもあるかもしれないけど、それでもちゃんとサッカーは生き残っていくはずですよ。だから本当に、僕らは、地域に根差す活動をしっかりとやっていかなきゃいけないと思っています。

熊本は自分の故郷でもあるし、熊本日日新聞社(熊日)は、田川さんとか、その前の永野さんとかからおつきあいがありますが、「なんで熊日がサッカーなんだろう?」って僕も最初思いました。今は村上(宗隆)選手で盛り上がってますが、普通だと野球でしょう?そういう中で、ちゃんとサッカーというスポーツを応援してくれている。そしたら今度はバスケットボールのチームも出来た。熊本ヴォルターズの試合が終わり、チームのユニフォームを着た大勢の人が下通とかを歩いている様子を見たり、ロアッソの試合の時には、赤いユニフォームを着ている人が増えたりするとすごく嬉しいです。地域でスポーツを育てて、地域の色を出していく、それが青いユニフォームにきっと繋がっていくと思うんです。心から熊本を応援しています。そして日本代表をどうぞよろしくお願いします!

**日比野** まちづくりって、続けることだと思うんですよ。熊本から2009年に始まったマッチフラッグプロジェクト、それから、いろんな場所でやり続けて今に至ります。継続のポイントは、「こうじゃないといけない」と決めないこと。柔軟に、その時その時の、その土地の、その時代の状況に合わせていくことが大事で、それが進化に繋がります。他を拒絶するんじゃなくて受入れながら

継続していくことが、きっとまちづくりになっていくと思っています。

このマッチフラッグも、2050年に日本が優勝する時に向かって継続していきたいと思っています。大会ごとのマッチフラッグの種類が増えれば増えるほど、優勝に近づくということなので、今のところ最高で4種類ですが、5種類、6種類、7種類になるように頑張っていきたいと思います、頑張りましょう！最後に岡田さん、ドイツ戦に向け一言。

**岡田** 必ず勝つ！「岡田が勝つって言ってた」と既にネットに出ているらしいね（笑）。

**日比野** 第2戦目のコスタリカ戦は、どうでしょうか？

**田嶋** ここが一番重要です。ここでしっかりと勝ち点を取れるかどうかのカギです。

**日比野** そして第3戦目。是非ここで、勝ち点3取れば行けるとか、得失点差で行けるとか、そんな試合になると思ってます。皆さん今日は本当にありがとうございました！



編集：富澤治子（熊本市現代美術館主幹兼主査・学芸員）